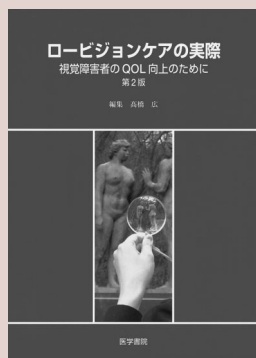


（ 困った時、調べたい時の ロービジョンケアのバイブル！ ）



ロービジョンケアの実際 視覚障害者のQOL向上のために 第2版

高橋 広 編 B5判・328ページ

定価 3990 円(本体 3800 円+税 5 %) ISBN 4-260-00216-3 医学書院 2006

評者

大音清香

日本眼科看護研究会理事長／
西葛西・井上眼科病院看護部長

本書が発刊される直前、編集を担われた高橋広先生から「今までにないロービジョンケアのかかわりに視点を置いて第2版を“開発”しました」と電話をいただき、期待が膨らんだ。それから数週間後、届いたその本の表紙中央には、「乙女の像」に焦点を合わせ、その像に凸レンズでピントを合わせた写真が配されている。鮮明な「乙女の像」をレンズ越しに読者に見せるデザインから、モノを見るための探究心と、見ようとする気持ちの大切さが伝わってきた。

ロービジョンケアには看護師の力が必須

一般に、ロービジョンケアの担い手として看護師の影は薄い。しかし、看護師は必要ないのだろうか？ 病院の窓口で戸惑っている患者が、視力障害著明なことがある。そんな時、本書に記されている生活面の援助を把握していれば、自ずと「どうされましたか？」と声かけし、手を差し伸べられる。患者は安らぎを感じると同時に不安なことなどを相談したくなるのではないかな。必要ないのではなく、必要に答えていないのではないかなと思えてならない。

この第2版では、ロービジョンケアを実践するには、まずはリハビリテーションの根底にある考え方を認識してから眼科の特徴や眼科医療を理解し、コメディカル役割とは何かを考えていく内容に整理されている。これが今回大幅な改訂を行なったねら

いだったことがわかる。特に、医療スタッフの役割が充実して述べられている。たとえば、医師のリーダーシップのとり方については、編者の豊富な経験に裏打ちされた主張で貫かれており、説得力に富む内容になっているほか、コメディカル(視能訓練士、歩行訓練士、理学療法士、作業療法士、医療ソーシャルワーカー、看護師など)の活動をそれぞれ取り上げ、その役割が明確に記されている。さらに、実践面では難しいと感じられる教育関係者、社会福祉活動との連携も含め、関係者がどのようにロービジョン者にかかわっていけばよいのかについて、現状のデータ分析に基づき、リハビリテーションの考え方に立脚した役割論が展開されており、その流れが多職種間の連携の重要性を一層際立たせている。

ロービジョン者への看護の役割が不明確な現在、それを一気に解決するのは無理だとしても、看護にもできることはある。装具・補装具にかかわらず、今維持されている機能でできることを見出し、できることを・できるだけ・できる時に発揮するためのケア、それが心の支えとなり、自立する意欲につながるケア——看護そのものが、そのままロービジョン者へのケアにもつながっているのである。

終章(第9章)「看護・介護に必要な援助とくふう」で看護援助の実際が述べられているが、強いて言えば、本章でリハビリテーション看護の発想に基づいて、経過を辿っていく過程が記されていると、看護の役割がもっとわかりやすかったかな？ とよけいに欲がでてる関心深い著書である。

■ご購入は、最寄の医書専門店または医学書院販売部 電話(03)3817-5657(直通)まで。
ホームページ(<http://www.igaku-shoin.co.jp>)からもお申し込みいただけます。